



令和4年2月21日
令和3年度学校だより NO.52①
加古川市立平荘小学校

冬季北京オリンピックより

昨夜（2月20日）冬季北京オリンピックの閉会式がありました。オリンピック開催中は、それぞれの選手の頑張りを、日々楽しみにしていました。

子どもたちには、結果だけを見るのではなく、選手の生き方（考え方）にも関心をもってもらえるとうれしいなと思っています。そして、自分の生活に活かしてほしいなと思います。

例えば、

フィギュアスケートの羽生結弦選手のインタビューでは、金メダルのネーサン・チェン選手の素晴らしい演技を称えるとともに、オリンピックの金を目指して頑張ってきたことやたくさん努力をしてきたことについて触れられていました。同時に、大会に関係している方々やボランティアの方々に対して感謝の気持ちを表されていました。ショートプログラムの時の悔しい思いを語りつつも、オリンピックを支えてくださっている方々への感謝の気持ちを常に持ち、その気持ちを伝えているところが本当に素晴らしいと思います。

実際の羽生結弦選手の言葉は、「この大会に関係している方々、ボランティアの方々、今回、氷を作っている方々に感謝したい。ショートプログラムの時に氷に引っかかりちょっと不運なミスだな、悔しかったというのはあります。でも、**本当に滑りやすくてとびやすくて、気持ちのいい会場で、気持ちのいいリンクでした。この場を借りて感謝したいと思います。**」です。

カーリング女子の日本代表は、「ミスはミスにしない」と言われました。日本は、2月18日の準決勝でスイスと戦いました。自分たちの作戦がうまくいかなかった時に、状況を瞬時に察知し作戦を「プランB」に切り替え、ミスはミスにしませんでした。

そして、チーム全員で自分たちの試合を戦いきりました。

ストーンの配置を見て4人がそれぞれ意見を言い合い作戦を立てるシーンや仲間を励まし合って声をかけているシーン、笑顔で戦っているシーン等、とても印象的です。

「今日は、**チームみんなでどういう試合にしたいかしっかり話し合っ**て試合に入れたことが**すごく良かった。**」

「決勝という今まで経験したことのない試合に出られるが、やることは変わらず、**チーム全員で自分たちの試合を戦いきるだけかな**と思う。**作戦会議をしたい。**」等、選手の言葉です。

オリンピックの観戦や競技・演技後の選手のインタビュー等では、多くの選手のオリンピックに臨む姿勢や考え方・価値観に触れることができます。子どもたちには、オリンピックを通して、いろいろなことを感じ、学んでほしいと思います。

狂言学習の仕上げを！

年度当初は、2月17日（木）が平荘小学校第21回狂言発表会の予定日でした。ところが、兵庫県がまん延防止等重点措置の適用地域となったため、狂言発表会が延期となってしまいました。

そして、この度、さらにまん延防止等重点措置の期間が3月6日まで延長になったことを受け、第21回狂言発表会も3月10日（木）に延期とさせていただきます。

6年生の子どもたちにとっては、狂言発表会が延期されるたびに、モチベーションの維持が重要になっています。

6年生のみなさん、3月10日（木）の狂言発表会に向けて、今年度の狂言開きの日のことを思い出しながら、演目を仕上げてください。

＜11月12日 狂言開き 先生の話より＞

きびしい言葉ですが、当日失敗したら、失敗です。しかし、これだけは言えることがあります。**歯を食いしばって頑張った練習は、マイナスにはならない**ということです。

狂言は、リレー形式で演じていきます。自分だけが輝けばいいのではありません。自分だけが輝く演技は、評価されません。**一生懸命に、真面目に、コツコツと努力している人が評価される**のです。

声小さい人が注意されるのではありません。自分の全てを出さない人は注意されます。

狂言は、そんなに簡単にはクリアできません。

先生たちは、6年生を全力でサポートします。わからないことがあれば、先生に相談してください。

6年生のみなさんも、**お互いに支え合って、これからの3か月間、頑張ってください。**

狂言学習をどう仕上げる？（6年生）

6年生の子どもたちは、既にセリフをしっかり覚えています。言葉は大丈夫です。では、何を仕上げるように今頑張っているのでしょうか。

子どもたちは、動き（立ち振る舞い）、目線や声の届け方、間のととり方、話すスピード等を意識しながら練習に励んでいます。

「やらされている自分（受動的）」から

「やる自分（能動的・主体的）」へ

狂言では、**守らなければならないこと**と、自分たちの創意工夫で**自由にできること**とがあります。それは、**狂言の舞台である三間(5.4メートル)四方の正方形の中で演技者が演じるということは守らなければならないこと**です。そして、その三間の舞台の中で**演じることは、演技者に任されているのです。自分たちの狂言を仕上げるということは、狂言の舞台の中で演技者が役になりきって工夫して演じていくということ**です。

平荘小学校の狂言を仕上げる

下記は、8月に、今年度の狂言学習のご指導をお願いしに、山口耕道先生のところにお伺いした際のお話を紹介した『学年だより（いなほ）』の一部です。

6年生の子どもたちには、今年度の狂言学習の仕上げに際して、平荘小学校の狂言学習が目指している目的を再度確認しながら、最終的に自分たちが満足できる狂言に仕上げたいと考えています。

そして、月日の経つのも早いもので、3月が間近に迫ってきています。6年生にとっては、狂言発表会や小学校6年間の学びの集大成である卒業式が控えています。その一つ一つの行事を精一杯頑張った形で迎えてほしい（迎えさせたい）と、全教職員も願いながらサポートをしているところです。

山口耕道先生のお話<<8月の『学校だより』より

●狂言は、言葉で伝えるので、どんどん声を出させてほしい。

●狂言は、チームワークが必要。話の流れがあって、自分の場（出番）がある。つながりがある。

●狂言には笑いがあるが、笑いが起こるまでにプロセスがある。それまでの過程が大事。

●笑いについて、その子だけが受けるのは違う。それぞれに役割がある。演じている者の心の内が見える。



●声の大きい小さいではなく、頑張っている姿が大事。頑張っている姿があれば、声小さくても、観客は見よう聞こうとする。

●教え方もあるが学び方もある。学び方で、意欲や努力、工夫が見られるとうれしい。黙って次の指示を待つタイプ、「これは、どうしたらいいですか」と聞くタイプ…、自分で考えながら、聞いてくれるとうれしい。

現在、子どもたちは、昼休みなどを利用して、自主的に狂言の練習をしています。その児童の姿は本当にうれしいものです。

子どもたちの演技が変わってきました。『努力は必ず報われる』『努力は裏切らない』ということわざがあります。子どもたちには、この経験を大切に、今後の生活に活かしてほしいと思います。

